共同溝建設予定地

（庄・蔵本遺跡）

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1997年10月

徳島大学埋蔵文化財調査委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

1　**調査地の名称**　庄・蔵本遺跡

2　**調査地の所在地**　徳島市蔵本町３丁目 18 番地の 15

3　**調査期間**　平成８年 11 月１日 開始
平成９年６月７日終了

4　**調査面積**　1,754 ㎡

5　**調査体制**　調査主体　徳島大学埋蔵文化財調査委員会　委員長　武田克之
調査担当者　徳島大学埋蔵文化財調査室　北條芳隆
橋本達也
中村　豊

6　**調査の目的**　大学構内の共同溝建設に伴い、庄・蔵本遺跡について調査する。

7　**調査経過**

調査地が細長く通路を寸断するため、学内の交通事情を考慮に入れて以下のように５地区（１区は面積が広いため、西と東に分けそれぞれを１ａ区・１ｂ区とした。）に分けて調査をおこなった（図１）。

①１ａ区（担当橋本）

調査面積 305 ㎡。1996 年 12 月６日重機掘削開始。攪乱が著しく第１遺構面の調査難航。1997 年１月６日ようやく終了。１月７日より第２遺構面調査開始、１～３号墓検出。２月 17 日完掘写真撮影をおこない終了。第３遺構面調査着手。遺構の数は少ないが、断面逆台形の大溝検出。４月２日調査終了。

②１ｂ区（担当中村）

調査面積 300 ㎡。1996 年 11 月 26 日重機掘削開始。12 月３日第１遺構面の調査着手。12 月 11 日終了。翌日から第２遺構面調査着手。土坑・溝をはじめとする多量の遺構検出。1997 年２月 10 日終了。翌日より第３遺構面調査開始。断面Ｖ字の大溝検出。長楕円形の土坑を 12 基検出。多量の遺物が出土し、調査は難航を極める。遺構は東へいくほど密集する。３月 28 日県立博物館の魚島純一氏に長楕円形土坑の土層断面のはぎとりをしてもらう。３月 31 日調査終了。第３遺構面は遺構密集地帯であった。

③２区（担当橋本）

調査面積 327 ㎡。1997 年４月 10 日重機掘削開始。４月 16 日第１遺構面調査開始。４月 18 日終了。同時に第２遺構面調査着手。５月 13 日終了。第３遺構面６月７日調査終了。全調査区中もっとも遺構・遺物量少ない。

④３区（担当北條）

調査面積 366 ㎡。1997 年１月 27 日重機掘削開始。２月４日第１遺構面調査開始。２月 12 日終了し、第２遺構面調査開始。一部をのぞき３月４日終了。第３遺構面３月 28 日終了。遺構密度それほど高くない。

⑤４区（担当中村）

調査面積 322 ㎡。1997 年３月 26 日重機掘削開始。４月７日第１遺構面調査開始。４月 14 日終了し、第２遺構面調査。４月 24 日から順次第３遺構面調査開始。１ｂ区に隣接しており、第３遺構面は遺構が密集していた。長楕円形の土坑 13 基検出、並行する２本の大溝検出。６月６日調査終了。

⑥５区（担当北條）

調査面積 134 ㎡。1996 年 11 月 28 日重機掘削開始。12 月３日より第１遺構面調査開始。12 月９日終了後第２遺構面調査開始。12 月 21 日より順次第３遺構面調査。1997 年１月 16 日調査終了。

8　堆積状況

遺構面は大きく分けて３枚確認することができる。現地表面下 0.7 ｍで第１遺構面に達する。第１遺構面は近世の遺構である。黄褐色粘質土をはさんで上下２枚存在する。その下に 0.2m ほど堆積する黒褐色シルト（古墳時代～中世の遺物包含層）を取り去ると第２遺構面に達する。弥生時代前期末から中世にかけての遺構を検出することができる。弥生時代前期後半の洪水砂である黄褐色砂質土を 0.3m 掘り下げると暗褐色粘質土に達する。この上面が第３遺構面であり、弥生時代前期前半に属する。

9　検出遺構

総遺構数は 682 である。種類別に土壙（小土壙、墓を含む）579、溝 96、住居址６、その他１で、調査区別の遺構数は表１のとおりである。

	土壙	溝	その他	計	第１・２遺構面	第３遺構面
１ａ区	82	13	1	96	95	1
１ｂ区	205	20	3	228	161	67
２区	33	12	1	46	44	2
３区	72	19	1	92	71	21
４区	163	26	0	189	66	123
５区	24	6	1	31	16	15
	579	96	7	682	445	229

表１　共同溝地区検出遺構数一覧

特に遺構が密集し、遺物の出土量が多いのは第１工区東半と第４工区である。この両区で総遺構数の 61 %、総遺物量の 48 %を占めた。

遺構は上層から第１遺構面（江戸時代）、第２遺構面（弥生時代前期末～古墳時代）、第３遺構面（弥生時代前期前半）の順におおよそ３層に分けて検出することができる。このうち、第１遺構面と第２遺構面の遺構は各地区ほぼ均等に分布する。これに対して、第３遺構面総遺構数の 83 %が第１工区東半と第４工区に集中するのである。遺構・遺物密度の濃淡は第３遺構面のそれにほぼ対応するといってよいだろう。学術的にとくに取り上げるべき発見もそこにあるため、今回はこれを中心に報告する。その他の詳細な報告は本報告書で果たしたい。

①弥生時代前期前半（約 2300 ～ 2200 年前）の環濠集落（図２）

１ｂ区と４区、そして１ａ区の東端部で、２列の平行する大規模な溝を検出した。出土した土器から時期は弥生時代前期前半（約 2200 年前）である。これらは 1995 年度の調査をふくめた位置関係から判断して１連のものであり、弧状あるいは環状を呈する。外側の溝は断面逆台形を呈し、上面幅約 3.5 ｍ・深さ約 1.5 ｍであり、内側の溝は断面Ｖ字で上面幅約２ｍ・深さ約 1.3 ｍである。粘土と砂が交互に堆積しており、水が流れていたらしい。用水路としての機能とともに、左右の壁面が急激な角度で掘られていることと、内側に柱穴がならぶ部分があり、柵をめぐらせていたらしいことからみて防御的な機能も兼ね備えていたとみられる。溝の中からは木器の未製品が出土しており、付近で木器の製作がおこなわれていたこともわかる。さらに、第３遺構面の遺構・遺物の 83 %が溝の内側に集中することからみて一帯が防御用の施設をともなう集落地であったことは間違いない。溝が完全に環状を呈するかどうかは今後の調査をまたねばならないが、環濠集落の一部である可能性が濃厚である。なお、この２本の溝のあいだにやや小規模の溝（断面Ｖ字・上面幅約１ｍ・深さ約 0.5 ｍ）を確認することができた。出土した土器は弥生時代前期初頭（約 2300 年前）であり、環濠を最初に掘削した時期はさらにさかのぼる。

②長楕円形の土壙群

溝の内側からは多量の焼土・炭化物・骨片が堆積した長楕円形の土壙 25 基を検出した。この土壙は岡山市南方遺跡、同市百間川沢田遺跡、岡山県総社市南溝手遺跡、愛媛県今治市久枝（さいだ）Ⅱ遺跡、香川県大川郡志度町鴨部（かべ）・川田遺跡などに類例をみることができる。土壙墓、ゴミ穴、貯蔵穴の可能性を考えることができるが、いまのところ性格を決定できずにいる。

③集落の継続期間

環濠をふくむ弥生時代前期前半の諸遺構は前期後半におこったとみられる洪水で運ばれた土砂によって埋没している。したがって、この集落の継続期間は約 100 年間ほどであり比較的短命であった。その後に営まれた遺構は、中断する時期があるものの各地区ほぼ均等に分布する。したがって、人々は断続的ではあるが少しずつ生活域を広げていったものと解釈することができる。

10　出土遺物（図３）

遺物は 42 cm× 32 cm× 19 cmのプラスチックケースで 280 箱分出土した。土器は 250 箱、

石器は20箱、木器10箱である。調査地区別の出土量は、1 a区－64箱、1 b区－91箱、2区－6箱、3区－25箱、4区－81箱、5区－13箱である。

大量の土器・石器・木器が出土した。そのうちの主要なものを図3に示した。土器は弥生時代前期各時期の遺構にともなって器種構成を把握するのに良好な状態で出土している。他に太型蛤刃石斧の柄、木製の鋤、石包丁・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石鑿・石製紡錘車・磨製石剣など多量の大陸系磨製石器（水稲耕作とともに朝鮮半島から伝来した石器群）、漁網錘、土製紡錘車などが出土した。詳細な報告は本報告書で果たしたい。

11 まとめ

今回の調査で、本遺跡が四国最古級の弥生時代前期環濠集落であることがほぼ判明した。以前、南蔵本町2丁目の産八幡神社付近で弥生時代前期前半の竪穴住居跡や溝がみつかっている（1989 年度徳島市教育委員会調査）。これが今回発見した集落の一部であると仮定のうえで環濠を推定復元すると、径100 m前後になる。県内ではいまだ弥生時代前期に属する同種・同規模の遺跡は発見されていない。また、各種石器・木器の未製品が出土しており、ここで製作し周辺遺跡に供給していたとみられる。したがって、本遺跡は当時の中核的な初期農耕集落であった。

今までの調査では一括資料にめぐまれず、九州や近畿の編年に照らし合わせながら時期を考えねばならなかったが、今回の調査では弥生時代前期の遺構から出土した土器によって編年を確立することが可能となった。今後は集落の変遷を詳細にとらえることができるだろう。

集落は急峻な濠と柵によって堅固に防御されている。戦争が激化するのは弥生時代中期と考えられているが、その開始直後からすでに各集団間は緊張関係にあったことがうかがえる。本遺跡の住民も水稲耕作の技術だけでなく、このように緊張した状況も同時に導入したとみるべきであろう。

東方約 800 mの佐古浄水場内にある三谷遺跡（1991 年度徳島市教育委員会調査）では最も新しい縄文土器（突帯文土器）と最古の弥生土器が共存し、石棒をはじめとする縄文時代特有の石器を使用しており、縄文時代の伝統的な生活習慣を維持していたらしい。これに対し、ほとんど時間差のない本遺跡では弥生土器のみを使用し、多量の大陸系磨製石器・環濠といった新たな文化を採用して、水稲耕作にもとづく生活を営んでいた。この事実は、一時期縄文人と弥生人が棲み分けていた可能性を示している。

調査にあたりご協力いただいた方々（敬称略）。

東　潮（徳島大学）、石野博信（徳島文理大学）、上村俊雄（鹿児島大学）、魚島純一（徳島県立博物館）、梅木謙一（松山市埋蔵文化財センター）、大久保徹也（香川県埋蔵文化財センター）、岡山真知子（徳島県立城東高校）、勝浦康守（徳島市教育委員会）、金田章裕（京都大学）、久保脇美朗（徳島県埋蔵文化財センター）、滝山雄一（徳島市教育委員会）、田崎博之（愛媛大学）、田畑直彦（山口大学）、都出比呂志（大阪大学）、丹羽佑一（香川大学）、橋口達也（福岡県教育委員会）、光谷拓実（奈良国立文化財研究所）、森下英治（香川県埋蔵文化財センター）、湯浅利彦（徳島県教育委員会）

図1　調査地の位置　　1：1600

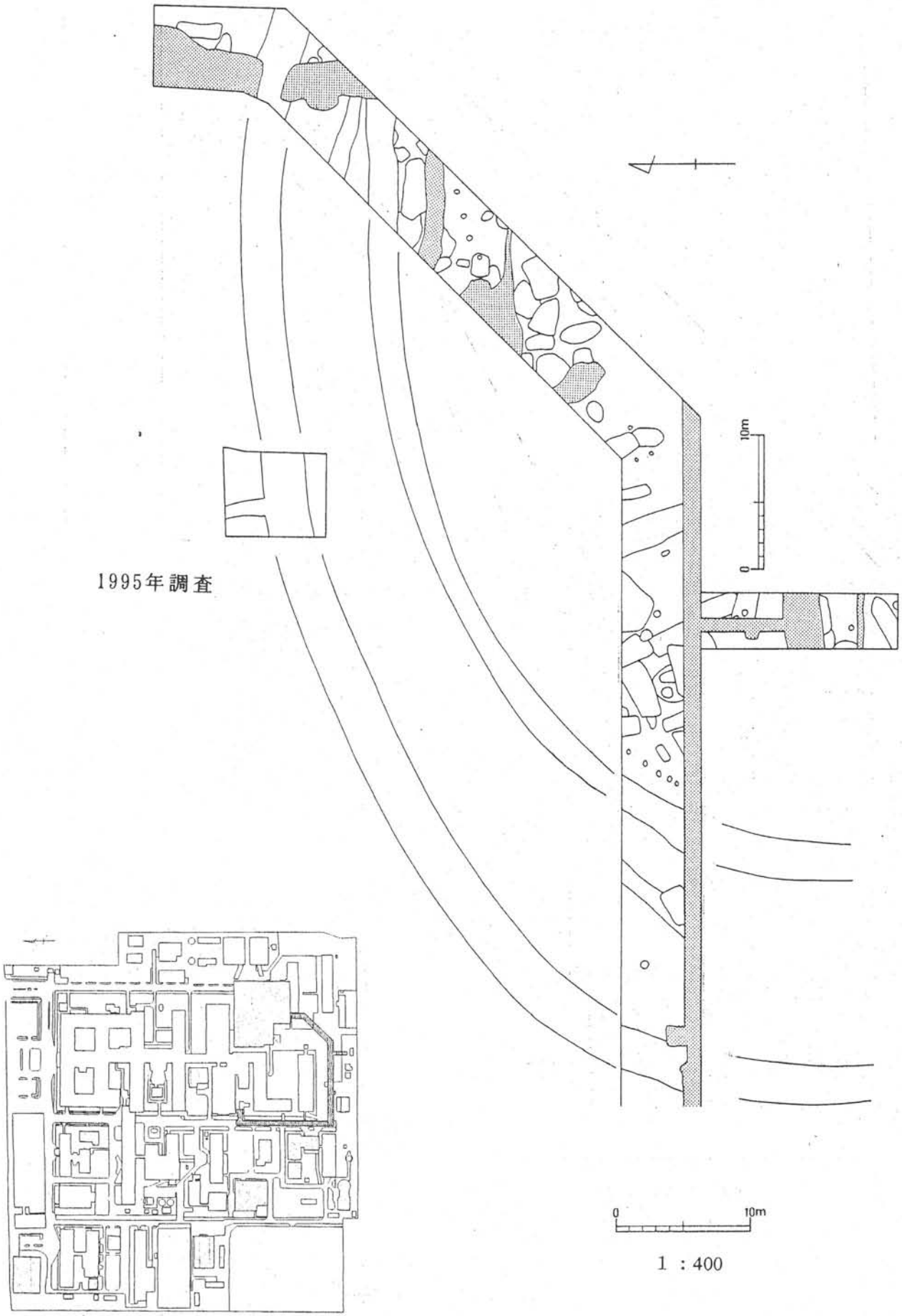

図２　第３遺構面（弥生時代前期前半）の遺構と環濠推定復元図
（アミ目は攪乱）

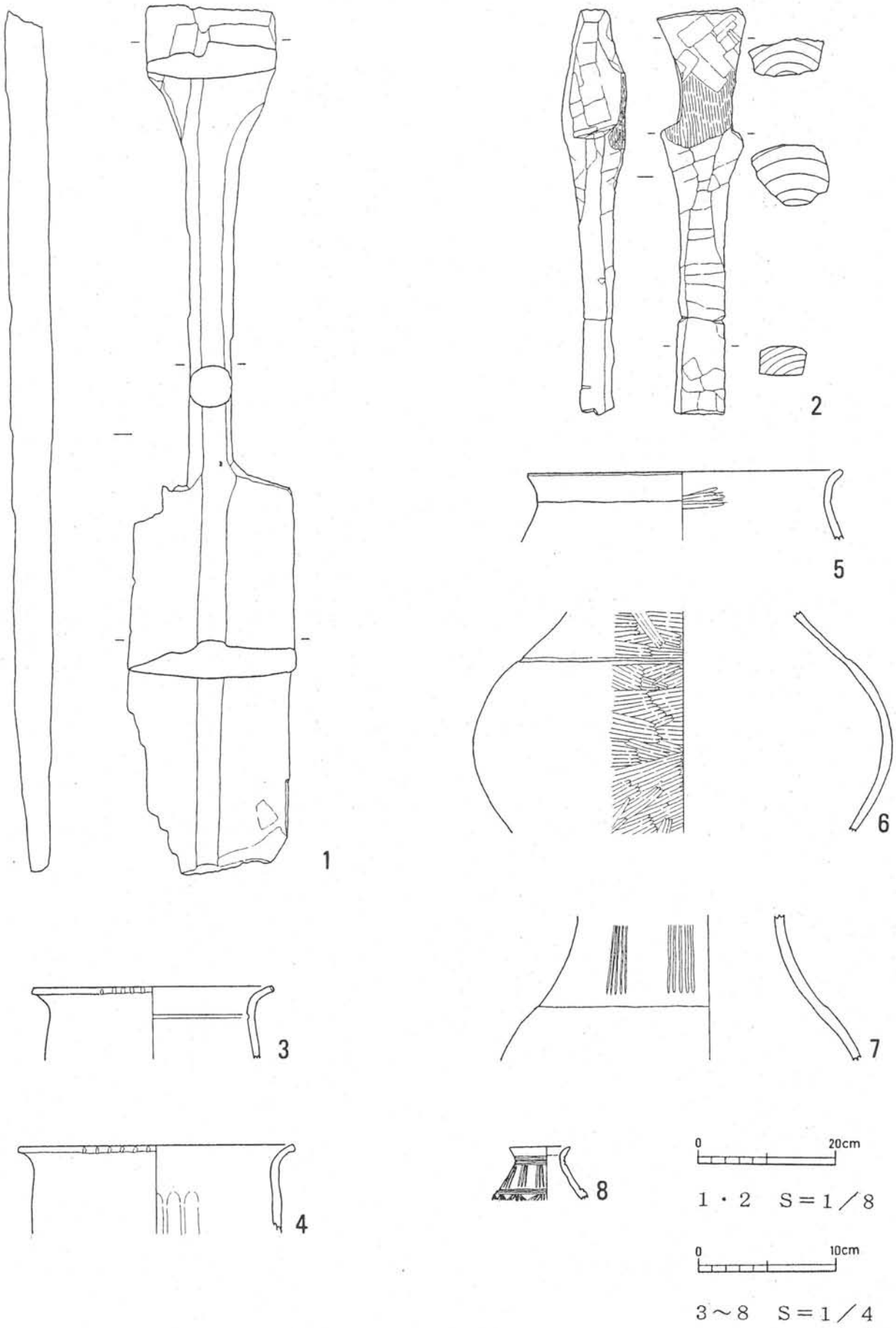

図３　第３遺構面（弥生時代前期前半）の主要出土遺物

環濠の内側（西から）

長楕円形の土壙

外濠の規模

内濠土層堆積状況

内濠と柵列